

平成 30 年 5 月 18 日現在

機関番号：32633

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K15899

研究課題名(和文)都市部世代間交流のナラティブを含む看護支援の開発と混合研究法を用いた評価法の確立

研究課題名(英文)Development of assessment and nursing support involving participants' narratives in intergenerational programs in the urban communities through mixed methods study

研究代表者

亀井 智子(KAMEI, TOMOKO)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：80238443

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、高齢者と小学生主導型の世代間交流について、ナラティブを取り入れた看護支援方法を開発すること、世代間交流の総体の評価法を混合研究法(MMR)を用いて開発することを目的とした。方法は、並行的収斂デザインによるMMRとし、世代間交流や満足度の量的評価と交流の様相の質的評価を収斂した。高齢者群17名、小学生群7名の69回分の分析から、一般・虚弱・認知症群の交流の特徴が記述された。Journal of MMR誌等にジョイントディスプレイとともに掲載された16論文を分析し、計5種類の統合タイプが明確化した。MMR研究支援ツール(m-STAR 21)、およびMMR支援ハンドブックを完成した。

研究成果の概要(英文):A mixed methods was used to clarify; 1)People-Centered intergenerational programs involving participants' narratives to develop appropriate nursing support between older adults and school aged-children, and 2) Create assessment methods to convergent the qualitative and the quantitative data. The participants were seven children and 18 older adults. The data were collected through 69 sessions. Findings suggests that older adults' communication style were typically different between non-frail, frail and dementia groups and conclude promoting linguistic, emotional, and positive attitudinal experiences for both generations led to their creation of satisfying relationships. Moreover, we screened 16 joint displays from Journal of MMR and other paper, and analyzed and classified into five types of data integration methods. We conclude a research support tool (MM Study Supporting Tool for Academic Research 21; m-STAR 21) and edit a concept handbook of MMR in Nursing through this project.

研究分野：老年看護学

キーワード：世代間交流 高齢者 小学生 混合研究法 看護学

1. 研究開始当初の背景

世代間交流とは、異世代の人々が相互に協力し合って働き助け合うこと、高齢者が習得した智恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること(Newman & Smith, 1997)をさし、高齢者と子どもの互恵的ニーズ、および世代継承性へのニーズにより、地域や学校、施設などにおいて交流する活動を取り入れたプログラムとして、実践と理論化が進んでいる。看護学分野においても、地域づくり支援としてのプログラム開発や(糸井, 2015)、介護予防、および人の生涯発達を支援する新たな看護方法(亀井, 2017)として発展している。

世代間交流の効果には、高齢者の主観的健康感や社会的サポート・ネットワーク増進への有効性(藤原他, 2006)、高齢者のうつや生活の質の改善、および子どもの高齢者観の維持(Kamei et al., 2011)、また子育て世代の母親の育児の間の気分の変化(糸井, 2016)など、身体的、心理的、社会的 well-being な状態への変化が数多く報告されている(糸井他, 2012)。これらのことから、地域においての世代間交流への意識の向上や、継続的に世代間交流をもつためのプログラムづくり、場所の確保などが重要である。特に両世代が暮らす「地域」においては、そこで生活する人々の文化や人生の物語(ナラティブストーリー)があり、各世代の経験や日常の自然な語り合いを重視することが重要である。

これまでの世代間交流活動の評価方法は、量的側面や質的側面を別々に行うに留まり、世代間交流の総体を評価するための質的評価と量的評価の両者を統合した評価方法の開発は進められていなかった。そこで、本研究では、都市部世代間交流のナラティブを含む看護支援を開発し、質・量2種データを統合する研究方法である、混合研究方法(Mixed-Methods Research)を用い、世代間交流の質と量の2種データの統合方法に着目し、混合研究方法を用いた評価方法を確立することとした。

2. 研究の目的

都市部在住の高齢者と小学生を対象とした世代間交流看護支援について、(1)本人のナラティブを取り入れた市民主導型の看護支援方法を開発すること、(2)混合研究方法を用いて、世代間交流の質的・量的側面を統合した総体としての評価法を開発すること。

3. 研究の方法

(1)本人のナラティブを取り入れた市民主導型の看護支援の開発方法

対象:東京都都市部の看護系大学を拠点として毎週継続的に開催されるAプログラムをフィールドとし、2015年度~2017年度の継続参加者を研究対象とした。適格基準は、65歳以上の健康、虚弱、軽度認知症をもつ者とした。対象小学生は、保護者の同意が得られ

た近隣の小学1年生~6年生とした。

世代間交流Aプログラムの概要: Aプログラムは、People-Centered Care(市民主導によるケア)の理念に基づいて2007年度に創設された。開催頻度は週1回、3時間で、年間30回程度開催される。運営は、看護系大学老年看護学の教員、地域在住ボランティアにより行われている。各回の前半60分~90分は高齢者のみであることが多く、後半60分~90分の間に小学生が下校してくることが多い。各回の内容は、世代間交流ゲーム、交流書道、おやつ作り、ちぎり絵や編物などの共同制作や個人制作、ボランティアによる読み語りの他、小学生のもつ特技を披露したり、小学生の学校生活の様子や高齢者の昔話、ボランティア等の生きたストーリーを聞く機会を日常的に取り入れている。

研究方法: 並行的収斂デザインによる混合研究方法を用いた。世代間交流プログラム参加者の量的データと質的データは相互に影響を与えないよう、別々に収集した(図1)。

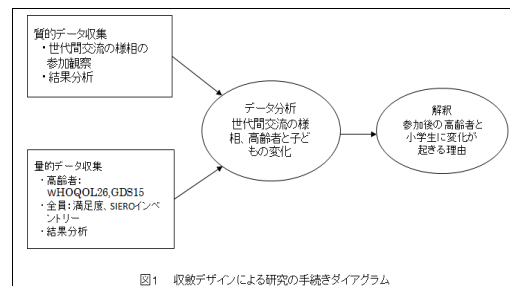


図1 収斂デザインによる研究の手続きダイアグラム

データ収集手順と分析方法: 質的データは、参加者のナラティブとして、プログラム中の相互交流の様相(行動、言動、会話とその内容、態度、表情など)を研究者が参加観察した。量的データは、以下の質問紙を3か月毎に配布し、自記式回答を得た。WHO-QOL26、日本語版 Geriatric Depression Scale (GDS)-15。参加満足度は、VAS-10により各回終了時に収集した。世代間交流量は、プログラム参加中の交流の様相を聖路加式世代間交流観察(SIERO)インベントリーを用いて研究者が観察した。

データ分析、および2種データの統合: 質的データは、内容分析を行い、量的データは統計学的に分析した。両者の収斂は、尺度による客観的な世代間交流の量、プログラムへの主観的な満足度の量、交流観察の結果を統合し、世代間交流プログラムの総体を評価するための方法を探索した。

(2)混合研究方法を用いた世代間交流の質的・量的側面を統合した総体の評価法の開発

対象: 混合研究法国際誌である Journal of Mixed Methods Research 誌 (SAGE Publication)を調査の対象とし、2007年1巻1号~2016年10巻4号に掲載された257論文、およびハンドサーチにより収集した混合研究方法を用いた研究論文のうち、質・量2種データの統合結果をジョイントディスプレイを提示している論文を分析の対象とした。

方法:1次スクリーニングは、研究者2名で行い、ジョイントディスプレイが本文中に提示されている論文を採択した。

分析対象となった論文の精読方法: により抽出された論文を、本研究用に著者らが暫定的に開発した「混合研究法を用いた研究評価ツール」を用いて、記述内容を詳細に分析した。論文評価の視点は、その研究に混合研究法を用いる理由の記述が適切か、質的研究と量的研究のサンプリングやサンプル抽出方法の記述が適切か、質的・量的各研究の分析が妥当であるか、2種データの統合方法や統合内容が妥当であるか、結果と考察の記述が妥当であるか等の計21項目とした。

ジョイントディスプレイの分析方法:各論文に掲載されているジョイントディスプレイを混合研究法のタイプに着目して特徴を分析した。

4. 研究成果

(1)本人のナラティブを取り入れた市民主導型の看護支援方法の開発結果

対象は高齢者群 18 名、小学生群 7 名、ボランティア群 6 名、支援者群 6 名であった。高齢者の平均年齢は一般高齢者(一般群)77.8 歳(n=8)、虚弱高齢者(虚弱群)84.8 歳(n=6)、認知症高齢者(認知症群)85.0 歳(n=4)で、一般群に比べ、虚弱群・認知症群は有意に年齢が高かった ($p = .028$) (表 1)

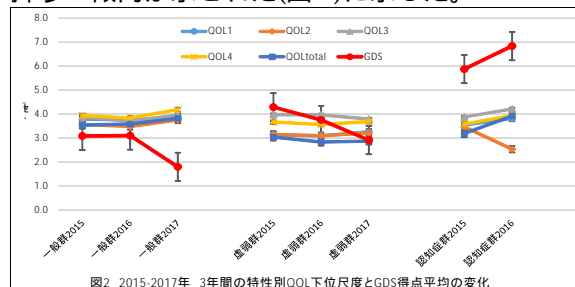
	高齢者			p	子ども
	一般群 n=8	虚弱群 n=6	認知症群 n=4		
平均年齢 (SD)	77.8 (4.7)	84.8 (4.6)	85.0 (4.4)	0.08	8.9 (3.2)
性別 女性 人 (%)	8 (100.0)	6 (100.0)	4 (100.0)	-	6 (85.7)
単身家族有り 人 (%)	6 (75.0)	6 (100.0)	2 (50.0)	-	7 (100.0)
NMスケール-早治 (SD)	49.5 (0.8)	40.3 (10.6)	39.0 (10.2)	0.07	-
転倒リスク平均	4.2 (0.6)	5.8 (2.2)	4.8 (2.6)	0.77	-
GDS-15平均 (SD)	3.9 (2.0)	4.5 (2.1)	5.5 (3.4)	0.60	-
参加回数平均 (SD)	23.1 (13.9)	30.8 (15.9)	33.3 (14.3)	0.54	27.1 (13.1)

NMスケール(0-50): 正常(30-49)、境界域(1-49)、軽度認知症(40-51)、中等度認知症(30-49)、重度認知症(16-40)
 転倒リスク(0-14): 滑点が低いほど転倒しやすい
 GDS(10-15): うつ傾向なし(10-14)、軽度うつ傾向(13-14)、中等度うつ(11)、重度うつ(12-15)

プログラム参加中の高齢者、小学生間に生じた世代間交流に関する行動、言動、態度、表情などの内容分析を行った結果、一般高齢者は【子どもに話しかける】【子どもの成長を口にする】、虚弱群では、【子どもの話をよく聞く】、認知症群では【子どもを眼で追い微笑む】、子どもでは【高齢者の様子をじっと見る】【高齢者にやり方を尋ねる】【高齢者を気遣う】などが特徴的に抽出された。

3年間継続的に参加した高齢者13名(一般群5名、虚弱群6名、および認知症群2名)を分析し、WHO-QOL26 (QOL)とGDS-15(抑うつ)の推移を分析した。高齢者各群の3年間の変化では、一般群のQOL平均(得点範囲:1~5点、高いほどQOLが高い)は3.7-3.7-3.9、虚弱群は3.4-3.3-3.4、認知症群は3.5-3.7であった。一般群はQOLの5つの下位尺度にほとんど差はみられなかった。一方、虚弱群は「QOL1(身体的領域)」と「QOL全体」の領域が他の領域より低かつ

た。GDS-15の変化では、一般群3.1-3.1-1.8で(得点が低いほどうつ傾向なし)、虚弱群は4.3-3.8-2.9、認知症群5.9-6.8(-)であった。GDS-15は認知症群が最も高く、次いで虚弱群、一般群の順であった。各群における経時変化に有意差は認められなかったが、認知症群は平均値が4.0以上で経過し、抑うつ傾向が示された(図2)に示した。



プログラム別の参加満足度(VAS-10 平均)では、「おやつ作り」高齢者群9.4点、小学生群8.6点、また「昔の遊び」がそれぞれ9.4点、8.5点と両世代で高かった。しかし、「身体を使った運動」では高齢者群9.1点に対し、小学生群は6.7点と満足度に差が見られた。

SIERO インベントリーによる世代間の交流量(SIERO インベントリー得点平均(0~17))では、一般群4.8、虚弱群4.2、認知症群3.2、および小学生群4.4であった。認知症群の交流量(3.2)は他の群に比べ有意に低かった($F = 6.84, p < .001$)。しかし、個別にみると、観察による交流量が低いと評価される高齢者でも、満足度が高値を示しているものがあった。

次に、混合研究法を用いた質データと量データを統合した。その結果、2種のジョイントディスプレイを作成できた。1つは、SIERO インベントリーによる世代間交流量(縦軸)とVAS-10によるプログラム参加の主観的満足度の程度(横軸)(いずれも量データの平均値を交点として、それに、交流プログラムの種類、参加者の特性(質データ)をジョイントさせたものである。このジョイントディスプレイにより、参加者の特性別に交流量が多く、満足度が高いプログラム(おやつ作り、昔遊び、ゲームなど)、交流量が多いが、満足度は中程度のプログラム(運動、共同制作など)、交流量は多くないが、満足度の高いプログラム(昔遊びなど)があり、健康な高齢者ではより交流量が多く、虚弱や認知機能低下のある高齢者では、満足度が高くて、交流量が少ない様子が捉えられた。

これに参加者の特性別のSIERO インベントリー得点の平均値の比較に加え、交流観察から得た参加者特性別の交流の特徴を加えたジョイントディスプレイでは、一般群では、能動的に小学生と交流し、時には叱るといった行動の質的特性が示された。虚弱群と認知

症群では、受動的な交流が特徴であり、子どもと共に場やおやつの時間を共有して、微笑むといった行動が観察された。参加者の性別別の SIERO インベントリーによる交流量に比較して質データを統合した対照比較型ジョイントディスプレイを作成した。

以上から、都市部世代間交流のナラティブとは、高齢者では子どもとの交流を通じて過去の回想が惹起され、それによって自身が生きてきた過去の振り返り、また日常的な出来事などの自然な会話のやりとり、また、子どもをほめ、毎週成長を喜んだり、叱責したりといったナラティブが起こっていたため、両世代をつなぐ看護支援が特に重要であると考えられた。

(2)混合研究法を用いた世代間交流の量的側面、質的側面を統合した総体としての評価法の開発結果

混合研究法を用いた研究論文を収集・評価し、各論文で性質の異なる2種のデータをどのように統合しているのか、JMMR 誌に2007年1巻1号～2016年10巻4号に掲載された257論文をスクリーニングした。その結果、ジョイントディスプレイが提示されていたのは12論文であった。ハンドサーチによる文献収集から4論文を収集し、計16ジョイントディスプレイを分析した。これらのジョイントディスプレイを Creswell(2015)による定義をもとに分類したところ、3種類が該当し、これ以外に本研究者が命名した2種類の計5種類に分類することができた。

対照比較型ジョイントディスプレイ:6文献(文献1～6)がこのタイプに該当した。このジョイントディスプレイでは、一つの表の中における質的データと量的データの対比や、ある特性をもつ対象グループにどのような数値的な傾向が生じているのかを理解することが可能となるように提示されていた。

テーマ別統計量型ジョイントディスプレイ:4文献(文献7～10)がこのタイプに該当した。このジョイントディスプレイでは、数値あるいは対象者のナラティブ、グループの特性、テーマの時間経過による頻度の違いについて、質と量を一目して容易に比較を行えるよう提示されていた。

結果追跡型ジョイントディスプレイ:1文献(文献11)がこのタイプに該当した。このジョイントディスプレイでは、ストレス反応の高低別による対象者個別の2時点の尺度得点と、その高低やその他の変数の結果を一覧し、ストレスパターンの違いの比較を容易に行えるように提示していた。

コンセプトマップ型ジョイントディスプレイ:質的研究の結果と量的研究結果を図やダイアグラムで示したジョイントディス

レイのことで、本研究者が命名したものである。4文献(文献12～15)がこのタイプに該当した。このジョイントディスプレイでは、カテゴリーや概念、調査結果、サブスケールを上下左右の空間に配置し、相互の関係性、類似性などを表現することを可能としていた。

データ変換型ジョイントディスプレイ:質的データを positive/negative や yes/no などに変換し、0,1 などの点数をそれぞれに与えて数量化(quantified)し、個人別にその数値のトータルスコアや点数を表中に示すもので、本研究者が命名したものである。1文献(文献16)がこれに該当した。

(3)混合研究法を用いた研究支援ツール(m-STAR 21)の開発

本研究中に当初、混合研究法の評価ツールとして作成したものについて、専門家のレビューを受けた。その結果、評価ツールとしての位置づけよりも、混合研究法の計画やプロセスといった混合研究法による研究計画自体を整理し、研究計画のポイントを明確にした支援ツールに変更する必要があることが指摘された。そのため、修正を加え、最終的に混合研究法を用いた研究支援ツール(Mixed Methods Study Supporting Tool for Academic Research 21;m-STAR 21)として再編・完成した。さらに、本研究の成果から、混合研究法自体を看護研究に引き寄せて理解するために、「混合研究法を用いた看護研究の考え方と進め方ハンドブック」を作成・編集した。その中に m-STAR 21 を含め、使用方法を解説し、2種の記入例と自己評価例を挙げた。さらに、より多くの研究者に役立てられるよう研究成果公開サイトを作成し、このハンドブック、および m-STAR 21 を公開した。

以上から、高齢者と小学生を対象とした世代間交流では、本人の交流への主観的な体験を言葉として引き出し、その体験を支援者が捉えていくことが、世代間交流の評価方法には含まれるべきであると考えられた。従来の質的・量的単一研究方法のみでは、各々の結果だけを見るに留まり、研究結果として把握できる範囲は限界があった。対象者のこれらのナラティブを積極的にとらえ、量的データの中に統合していくことで、虚弱高齢者や認知症をもつ高齢者、そして子ども世代からの視点を加えることができ、世代間交流とは何かの総体を可視化できる可能性がある。これは市民主導型の PCC の概念にも沿った方法であるといえる。

ジョイントディスプレイのレビューに使用した雑誌

Mixed Methods International Research Association (MMIRA). Retrieved from

ジョイントディスプレイの分析に用いた文献リスト

1. Kington, A., Sammons, P., Day, C., & Regan, E. (2011). Stories and Statistics: Describing Mixed Methods Study of Effective Classroom Practice, *Journal of Mixed Methods Research*, 5(2), 103-125. doi:10.1177/1558689810396092
2. Dickson, V. V., S. Lee, C., & Riegel, B. (2011). How Do Cognitive Function and Knowledge Affect Heart Failure Self-Care?, *Journal of Mixed Methods Research*, 5(2), 167-189. doi:10.1177/1558689811402355
3. Sedoglavich, V., Akoorie, M. E. M., & Pavlovich, K. (2014). Measuring Absorptive Capacity in High-Tech Companies: Mixing Qualitative and Quantitative Methods, *Journal of Mixed Methods Research*, 9(3), 252-272. doi:10.1177/1558689814535843
4. Panda, S., Das, R. S., Maruf, S. K. A., & Pahari, S. (2014). Exploring Stigma in Low HIV Prevalence Setting in Rural West Bengal, India: Identification of Intervention Considerations, *Journal of Mixed Methods Research*, 9(4), 362-385. doi:10.1177/1558689814535843
5. Fitzpatrick, K. R. (2016). Points of Convergence in Music Education: The Use of Data Labels as a Strategy for Mixed Methods Integration, *Journal of Mixed Methods Research*, 10(3), 273-291. doi:10.1177/1558689814560264
6. Smith, S. S. (2015). A three-step Approach to Exploring Ambiguous Networks, *Journal of Mixed Methods Research*, 10(4), 367-383. doi:10.1177/1558689815575855
7. Wittink, M. N., Barg, F. K., & Gallo, J. J. (2006). Unwritten Rules of Talking to Doctors about Depression: Integrating Qualitative and Quantitative Methods, *ANNALS OF FAMILY MEDICINE*, 4(4), 302-309. doi:10.1370/afm.558
8. Kennett, D. J., O'Hagan, F. T., & Cezer, D. (2008). Learned Resourcefulness and the Long-Term Benefits of a Chronic Pain Management Program, *Journal of Mixed Methods Research*, 2(4), 317-339. doi:10.1177/1558689808319732
9. 亀井智子, 糸井和佳, 梶井文子, 川上千春, 長谷川真澄, 杉本知子 (2010). 都市型多世代交流型デイプログラム参加者の12か月間の効果に関する断続的検証 Mixed Methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて. *日本老年看護学会誌*, 14(1), 16-24. doi:10.20696/jagn.14.1_16
10. Jehn, K. A., & Jonsen, K. (2010). A multimethod Approach to the Study of Sensitive Organizational Issues, *Journal of Mixed Methods Research*, 4(4), 313-341. doi:10.1177/1558689810380920
11. Giurgescu, C., Kavanaugh, K., Norr, K. F., Dancy, B.L., Twigg, N., McFarlin, B. L.,... White-Traut, R.C. (2013). Stressors, Resources, and Stress responses in pregnant African American women: A Mixed-Methods pilot study, *The Journal of Perinatal & Neonatal Nursing*, 27(1), 81-96. doi:10.1097/JPN.0b013e31828363c3
12. Daigneault, P.-M., & Jacob, S. (2013). Unexpected but Most Welcome: Mixed Methods for the Validation and Revision of the Participatory Evaluation Measurement Instrument, *Journal of Mixed Methods Research*, 8(1), 6-24. doi:10.1177/1558689813486190
13. Nowicki, E. A., Brown, J., & Stepien, M. (2013). Children's Structured Conceptualizations of Their Beliefs on the Causes of Learning Difficulties, *Journal of Mixed Methods Research*, 8(1), 69-82.

doi:10.1177/1558689813490834

14. Buck, G., Cook, K., Quigley, C., Eastwood, J., & Lucas, Y. (2009). Profiles of Urban, Low SES, African American Girls' Attitudes Toward Science, *Journal of Mixed Methods Research*, 3(4), 386-410. doi:10.1177/1558689809341797
15. Santos, J. G., & Erdmann, A. L. (2015). Governance of professional nursing practice in hospital setting: a mixed methods study, *Rev Latino-Am. Enfermagem*, 23(6), 1024-1032. doi:10.1590/0104-1169.0482.2645
16. Farmer, J., & Knapp, D. (2008). Interpretation Programs at a Historic Preservation Site, *Journal of Mixed Methods Research*, 2(4), 340-361. doi:10.1177/1558689808321026

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- (1) 亀井智子 (2017). 都市部地域における多世代交流型デイプログラムを通じた高齢者の社会参加支援と People-Centered Care の開発. *Geriatric Medicine*, 55 (2), 185-190. (査読なし)
- (2) 金盛琢也, 亀井智子, 山本由子 (2017). 都市部多世代交流型デイプログラムにおける参加高齢者特性および活動内容別の世代間交流の評価. *日本世代間交流学会誌*, 6 (1), 83-88. (査読あり)
- (3) 亀井智子 (2016). 看護における混合研究法の活用 - 世代間交流看護支援の研究を例に. *看護研究*, 49 (1), 16-24. (査読なし)
- (4) 伊藤ひとみ, 亀井智子 (2015). 都市部における高齢者と小学生の世代間交流プログラムで生じる両世代間の交流および高齢者の generativity(世代継承性)についてのエスノグラフィー. *日本世代間交流学会誌*, 5 (1), 37-45. (査読あり)
- (5) 亀井智子 (2015). 地域看護に活用できるインデックス - 世代間交流. *日本地域看護学会誌*, 18 (1), 118-121. (査読なし)

〔学会発表〕(計 8 件)

- (1) 入江由香子, 亀井智子, 川上千春, 金盛琢也, 目黒齊実, 山本由子, 糸井和佳 (2017). 多世代交流型デイプログラムにおける交流促進に適した運動プログラムの検討: 第22回聖路加看護学会学術大会講演集, 70, 2017年9月16日, 東京.
- (2) Kawakami, C., Kamei, T., Yamamoto, Y., Kanamori, T., & Meguro, S. (2017). Evaluation of Intergenerational day programs (IDP) focusing on children's perspective of older adults. *Mixed Methods International Research Association Asia Regional Conference/ 第3回日本混合研究法学会年次大会*, 93, 2017年8月5日, Osaka.
- (3) 亀井智子 (2017). 世代間交流を取り入れた都市部地域における介護予防. 第22回日本在宅ケア学会学術集会シンポジウム(シンポジスト), 50, 2017年7月15日, 北海道.
- (4) 山本由子, 亀井智子, 川上千春, 金盛琢也, 桑原良子, 目黒齊実 (2016). 多世代交流看護支援ベストプラクティスの開発: 第2報

プログラム別交流感と満足度の関係. 第36回日本看護科学学会学術集会講演集, O-19-4, 2016年12月11日, 東京.

(5) 亀井智子, 山本由子, 川上千春, 金盛琢也, 桑原良子, 目黒齊実 (2016). 多世代交流看護支援ベストプラクティスの開発: 第1参加者満足度によるプログラム評価. 第36回日本看護科学学会学術集会講演集, O-19-3, 2016年12月11日, 東京.

(6) 目黒齊実, 亀井智子, 川上千春, 金盛琢也, 桑原良子 (2016). 認知症高齢者への世代間交流看護支援の検討 - 2年7ヶ月の参加経過のケーススタディ -. 第21回聖路加看護学会学術大会講演集, 41, 2016年9月17日, 東京.

(7) 亀井智子, 山本由子, 糸井和佳, 川上千春, 金盛琢也 (2016). 混合研究法を用いた研究の評価ツール (MAT-21 ver.1) の開発. 第2回日本混合研究法学会年次大会, 44, 2016年8月28日, 東京.

(8) 金盛琢也, 亀井智子, 山本由子, 川上千春, 千吉良綾子 (2015). 虚弱高齢者と子どもの交流を促進する世代間交流看護支援方法の検討 - 混合研究法を用いて. 第35回日本看護科学学会学術集会講演集, 214, 2015年12月6日, 広島.

〔図書〕(計 3 件)

(1) 聖路加国際大学看護学研究科亀井科研編 (2018). 混合研究法を用いた看護研究の考え方と進め方ハンドブック, 1-87, 2018年2月27日, 東京: 聖路加国際大学看護学研究科亀井科研.

(2) 亀井智子 (2017). よくわかる看護研究の進め方・まとめ方, 第3版第1刷. 3. 混合研究法, 45-54, 2017年8月5日, 東京: 医歯薬出版.

(3) 亀井智子 (2016). 混合研究法への誘い - 質的・量的研究を統合する新しい実践兼杞憂アプローチ. 第8章基調講演3, 看護における混合研究法の活用例, 67-75, 2016年8月31日, 東京: 遠見書房.

〔その他〕

ホームページ等

看護研究における混合研究法支援サイト
<http://iss-research.jp/m-star21/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

亀井 智子 (KAMEI, Tomoko)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号: 80238443

(2) 研究分担者

山本 由子 (YAMAMOTO, Yuko)

武蔵野大学・人間科学部・准教授

研究者番号: 00550766

糸井 和佳 (ITOI, Waka)

帝京科学大学・医療科学部・准教授

研究者番号: 30453658

川上 千春 (KAWAKAMI, Chiharu)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号: 70643229

入江 由香子 (IRIE, Yukako)

高崎商科大学短期大学部・准教授

研究者番号: 00571382

(3) 連携研究者

金盛 琢也 (KANAMORI, Takuya)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号: 80745068

藤原 佳典 (FUJIWARA, Yoshinori)

東京都健康長寿医療センター研究所・社会参加と地域保健研究チーム・研究部長

研究者番号: 50332367

(4) 研究協力者

目黒 齊実 (MEGURO, Satomi)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号: 60781680

猪飼 やす子 (IGAI, Yasuko)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・博士後期課程

河田 萌生 (KAWADA, Aki)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・博士前期課程

藤村 芳子 (FUJIMURA, Yoshiko)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・博士前期課程

根岸 由依 (NEGISHI, Yui)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・博士前期課程

抱井 尚子 (KAKAI, Hisako)

青山学院大学・国際政治経済学部国際コミュニケーション学科・教授

マイケル フェッターズ (Michael, D. Fetters)

Michigan Mixed Methods Research and Scholarship Program Department of Family Medicine, University of Michigan Medical School ・ Professor

光永 悠彦 (MITSUNAGA, Haruhiko)

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・准教授